

生活文化の視座から雑草をみる

露崎 浩

秋田県立大学生物資源科学部アグリビジネス学科 e-mail : tuyuzaki@akita-pu.ac.jp

A Trial to Understand the Relationship between Human Beings and Weeds with Special Reference to Its Cultural Aspects

Hiroshi TSUYUZAKI

Department of Agriculture Business, Faculty of Bioresource Sciences, Akita Prefectural University

Summary

Weeds have been growing in man made habitats such as crop fields, around houses, road sides and so on for a long time. So, weeds seemed to have had cultural functions. Collection and classification of the cultural aspects was just begun by our study group. Cultural fields concerning weeds in Japan could be classified to culture, play, folkway, literature, art, religion, philosophy, education and citizen life as shown in Table 1. Fields of cultural aspects on weeds are thought to be wide, and each field has had a long history. Our investigation showed that the relationship between weeds and human beings are becoming poor in Japan. Children do not play with and eat weeds as used to be. Contact with weeds especially in childhood is thought to be very important because it sometimes gives them discovery, impression and pleasure of nature. Folkway, art, philosophy and citizen life concerning weeds enriches our life. Understanding weeds with special reference to its cultural aspects are thought to be important for human happiness and welfare.

Keywords : art, citizen life, education, folkway, happiness, literature, philosophy, religion, welfare
文学, 福祉, 芸術, 幸福, 教育, 民俗, 市民生活, 宗教, 哲学

はじめに

「深沢紅子 野の花美術館」(盛岡市)には、人里に生える多数の植物の水彩画が展示されている。連れだって来館した女性たちが「ああ、これがあの植物の名前なのね。」「そうそう、こんな色よ。」「小さいけどきれいな、野の花は。」などと小声で語りあっていた。

人里と耕地に生える植物は雑草(広義)と呼ばれる。私たちは日常の生活のなかでその雑草を目にし、時に手にとる。そのために雑草は、上記の女性たちの会話から伺えるような親近感もたれる植物となっている。雑草は人との長いつきあいのなかで、文化的な役割を担い、また文化的な対象となってきた。たとえば、遊び、民俗、文学、芸術そして教育といった分野において、雑草は一定の存在感をもっているように思える。また、「雑草のごとく」といった表現にみられるように、雑草は人生観(哲学)を投影する対象ともなっている。

このような雑草の文化的分野に対する人々の関心は低くはない。そこで、筆者らは「雑草と文化研究会」(日本雑草学会学術研究部会の一つ)を設け、雑草と文化的諸分野との関わりの事例を収集し、整理・体系化する試みを始めた。その一環として、雑草の遊びや食などに関するアンケート調査も開始した。

筆者は2007年に、その活動の成果の一部を、「雑草を文化の視座から捉える試み」というタイトルのもと、その大要を日本雑草学会のシンポジウム(露崎, 2007)で紹介した。本稿は、その要旨をもとに添削を行って原稿を調整し、人間・植物関係学会の会員の参考に資することをねらいとしたものである。

1. 雑草の関わる文化的分野

6万年前のネアンデルタール人が死者に花を手向けたことが洞窟遺跡の花粉分析から推測されている。その花は、ノコギリソウ(*Achillea* spp.), ラナンキュラス(*Ranunculus* spp.)およびムスカリ(*Muscari* spp.)などである(国立科学博物館, 2007)。日本でも古来より人は雑草を意識してきた。たとえば、「万葉集」には雑

2010年1月30日受付。

本稿の一部は、日本雑草学会から補助を受けた学術研究「雑草と文化」の研究活動による。本誌は2007年同学会シンポジウム要旨に添削を加えたものである。

第1表. 雑草の関わる文化的諸分野, 分科と具体例.

分野	分科	具体例
①遊び	遊び, 道くさ	草笛, 草相撲, 草細工, 道くさ
②民俗	衣食住の習俗, 和名・方言名, 民間薬	七草粥, 草染め, 菖蒲湯などの季節行事, 「植物和名の語源探求」(深津 正, 2000), 「野草雑記・野鳥雑記」(柳田国男, 1962), 「草づくし」(白洲正子, 1985)
③文学	文学, 詩, 詩画集	俳句, 万葉集, 「自分の花を」(相田みつを, 2001), 「鈴の鳴る道」(星野富弘, 1986)
④芸術	絵画, 写真, 音楽	野の花美術館(深沢紅子), 「自然の愉しみ方 秋」(山と溪谷社, 2000), 野に咲く花のように(杉山政美, 1983), 野に咲く花のように(Gackt, 2007)
⑤宗教	宗教行事	茅の輪くぐり, 盆花
⑥哲学	人生観, 自然観	雑草魂, 庭の草むしり, ことわざ・たとえ, 季節の行事
⑦教育	自然観察教育, 絵本	「植物の生活型の話」(岩瀬 徹, 2006), 福音館書店や偕成社による絵本類
⑧市民生活	季節感, 趣味	季節を告げる草, 生物季節, 生け花, 「小さな花の押し花」(大沢節子, 1988)

露崎(2007)を補足改変した。「」内は著書名.

草を題材とした詩歌が数多くみられる。奈良時代には「秋の七草」が詠われ、平安時代には「春の七草」の風習が定着した。江戸時代には、草を刈って受ける恩恵に対する感謝と供養の気持ちを込めて「草木供養塔」が建立された(山形大学出版会, 2007)。現在、蓬色や露草色など、数多くの雑草の和名が、色名として用いられている(増田・松尾, 2001)。

このように日本人は、雑草と広範な文化的分野において長く関わってきたのである。

上記のような雑草の関わる文化的分野について収集し、図書の日本十進分類法などを参考に分類して第1表にまとめた。以下に、各々の分野の事例を記した。

1) 遊び

第1図のプレートには、マツヨイグサ類(*Oenothera* spp.)やタデ類(*Polygonum* spp.)などの雑草に囲まれたなかで姉妹がトトロと遊ぶ風景が画かれている。子どもにとって雑草は、目線の高さの関係もあるのか、とくに身近な存在に思われる。草遊びは、五感を使い、ゲーム性もあり、観察・発見の楽しさも提供する。草遊びは、人間の成長にとって重要な要素になっていると考えられる。土居(2004)は植物を用いて簡単にできる遊びという観点から、九州地区を中心にアンケートを通してそのデータベースの作成を試みた。また、小林・小林(2008)は、イラストを交えて多数の草遊びを紹介している。雑草が遊びのなかのデザインとして使われている例として、花札が挙げられる(松尾, 2002)。



第1図. 「となりのトトロ」のプレート(ノリタケ食器製). (露崎, 2007 による).

2) 民俗

「君がため 春の野に出でて 若菜つむ わが衣手

に ゆきはふりつつ」(古今和歌集)

「せり・なずな・ごぎょう・はこべら・ほとけのざ・すずな・すずしろ これぞ七草」(万葉集, 山上憶良)

上記の歌にもみられるように、季節を楽しむ、あるいは若菜の生命力を身体に与える、といった理由から摘み菜は今も私たちの暮らしに溶け込んでいる。有岡(2008)は、春の七草の文化史を著している。平谷(2007)によれば、全国の約200名の会員からなる「摘み菜を伝える会」は、会報の発刊やセミナーなどを開催し、そのネットワークはさらに広がりを見せているという。

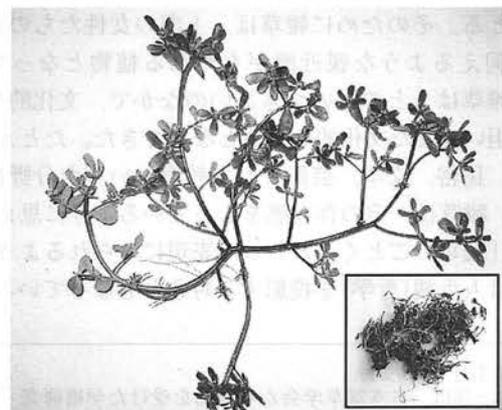
雑草の和名や方言名は、その植物の形態や生態はもちろん用途などを反映している場合が多い。スベリヒユ(*Portulaca oleracea* L.) (第2図)は、山形県米沢市では「ヒユ」と呼ばれ、今でも正月料理に使われており、(これを食べると)「ひよっと(ふと, といった意味)良いことがある。」と言いながら食するそうである。福岡県筑後地方では、ヤブマオウの仲間(*Boehmeria* spp.)の葉を、緩やかに丸めた親指と人差し指の穴に押し込み、もういっぽうの手のひらで叩き、ポンと音を出す遊びがある。そのため、これらのことを「ポンポンハ」という(松尾, 1996c)。深津(2000)は、数多くの植物の名前の由来を探求している。

3) 文学

「春の野にすみれ摘みにと来し吾ぞ 野をなつかしみひと夜宿にける」(万葉集, 山部赤人)

「夏草や 兵どもが 夢のあと」(奥の細道, 松尾芭蕉)

上記のように、雑草の登場する歌・俳句は多い。俳句に欠かせない季語に雑草の名前は多い。



第2図. スベリヒユ. (右下枠内の写真は保存食用に乾燥されたもの).

東京国際フォーラムにある「相田みつを美術館」は、静寂な雰囲気の中で「みつを」の書歌を味わえる。「じぶんの花を」(相田, 2001)に、「自分の花-雑草のうた」という詩がある。その内容は、「わたしは道ばたの雑草で、歩道のはじめのコンクリのわずかな割れ目を住み家としている。冬がくるまでに一つぶでも二つぶでもタネを残してゆくために、いま一生けんめいに花を咲かせている。踏まれても踏まれてもくじけることのない雑草の花を咲かせている。」というものである。

「鈴の鳴る道」(星野, 1986)は身近な植物の絵に詩や文章を添えた詩画集である。オオバコ(*Plantago asiatica* L.)の絵には「地面に張りついて生きている草にはこの大地に迫ってくる足音が聞こえるのではないか、それは人間にとって嬉しい知らせなのか否かを教えてくれ。」という内容の詩が添えられている。

4) 芸術

雑草と山野草をモチーフとした写真集は「山と溪谷社」他から多数出版されている。「野の花美術館(深沢紅子)」はすでに触れた。風景画のなかには必ずといってよいほど雑草が画かれている。アメリカの画家・Andrew Wyethの「遠雷」という作品は、女性と犬が草原に横たわっている風景画であるが、画面の過半は雑草である。中尾(1978)は「植物は雑草を生み出し、人間の恐るべき自然破壊の傷口を緑の衣でかくしてくれているのだ。(中略)雑草社会と人間社会はいまや運命共同体である。」と述べている。風景画にとっても雑草はなくてはならない存在となっている。

「野に咲く花のように」という歌(杉山, 1983; Gackt, 2007)もみられる。それらの歌詞において雑草は、「さわやか」あるいは「強い」存在と捉えられている。

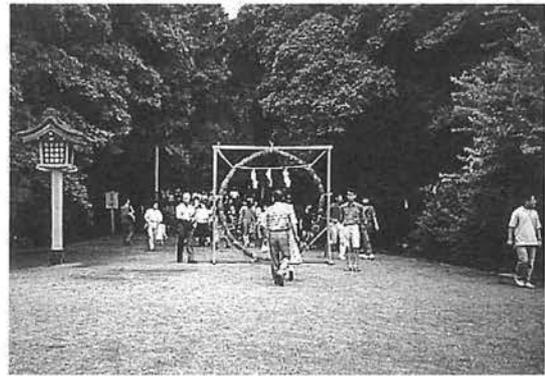
5) 宗教

湯浅(1993)は盆花に使われるミソハギ(*Lythrum anceps* Makino)は禊掃が転訛したとし、水辺に生えていたミソハギがかつて生身の人の禊に使われており、それが精霊の禊にも用いられるようになったのではないかと推察している。オミナエシ(*Patrinia scabiosaeifolia* Link)が盆花とされる理由なども考察されている。また、鹿児島で墓花の研究を進めてきた松尾英輔氏(元鹿児島大学農学部)は、「奄美大島では雑草化したセンニチコウ(*Gomphrena globosa* L.)が盆花と呼ばれていた。暑さと乾燥に強いかららしい。一般に盆花といわれる植物はその地方でお盆のころに咲く花が多いようだ。」という。

大祓の儀式は、チガヤ(*Imperata cylindrica* Beauv.)の葉を撻り結んで作った「茅の輪」を人々がくぐり、半年間の厄落としを祈願するものである(第3図)。

6) 哲学

先にふれた「相田みつを」や「星野富弘」の作品、そして「野に咲く花のように」にみられるように、雑草は哲学(人生観、自然観)に関わる存在となっている。



第3図. 茅の輪くぐり(大分県宇佐八幡).
(松尾英輔氏提供).

「雑草のごとく逞しく」は、子どもが強く逞しく成長することを祈るたとえでもあり、なつて欲しくない子どもの姿は「もやし」であり、「温室育ち」である(松尾, 1996b)。

「雑草」はスポーツにおいてもよく用いられる。秋田県立金足農業高校の野球部はかつて甲子園で桑田真澄、清原和博の両氏を擁するPL学園と準決勝で戦い、あと一步で涙をのんだ。その戦いぶりに対してであろうか、金足農業野球部に「雑草魂」という言葉が与えられている。スポーツにおいて雑草は、エリートとの対比において用いられることが多いようである。

7) 教育

岩瀬 徹氏は雑草の野外観察の方法を研究しそれを普及する活動を行い、多数の著書を世に送り出している。平成19年度日本雑草学会講演会の小集会(第1回雑草と文化研究会)で岩瀬氏は、「校庭の雑草を活用した授業の事例」という演題で講演をした。その折りに、千葉県立中央博物館が発行している「野草カード」が紹介された(第4図)。このカードの表には、雑草をスキャナーで取り込んだカラー画像が、裏にはその解説がある。その画像は、写真では得ることの難しい立体感・リアル感のあるもので、「ある小学生は思わずその画像を掴もうとした。」と岩瀬氏は語った。

「福音館書店」、「偕成社」などは、雑草が登場する絵本を出版している。

「蓼食う虫も好き好き」などのことわざやたとえ、季



第4図. 「野の草カード」(千葉県立中央博物館発刊).
(露崎, 2007による).

節行事に用いられる雑草は、そのイメージを通して人生観を表現し(松尾, 1995, 1996a,b, 2002), 日々の暮らしのなかで子どもを教育する役割を果たしてきた。

8) 市民生活

農家の人たちは田畑での除草において雑草と向き合っているが、一般市民もまた庭の草取り、あるいは土手などの公共性のある場所の草刈り作業などにおいて雑草と関わっている。

雑草は押し花に用いられることもある。大沢節子は著書「小さな花の押し花」(1988)で雑草の押し花の作品を紹介し、次の一文を添えている。「押し花をつくり始めて、たくさんの花と向き合ううちに、とりわけ自然の中で草むらに息づくように咲いている野の草花たちに強くひかれるようになりました。“小さな花”との出会いです。通りがかりの道端や空き地の片隅に目を向けてみましょう。小さな花がひっそりと咲いているのに気がつきます。一、二本摘み取り、押し花にしてカードにはってみます。時が過ぎれば枯れてしまう花も、カードの上に命をとどめて、優しく自然を語りかけてくれます。」

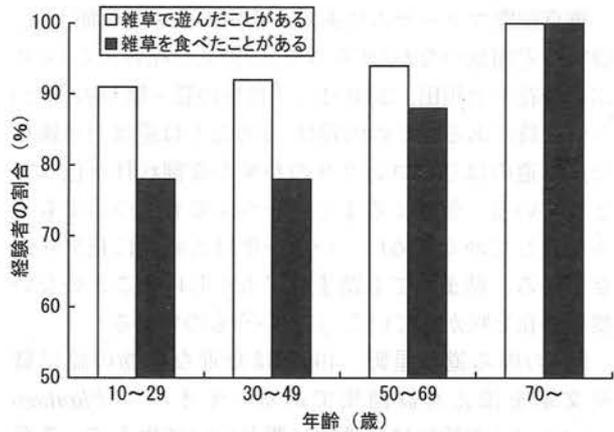
草刈りが行われた後の太平川(秋田市)の土手を歩くと、ヤブカンゾウ(*Hemerocallis fulva* L.)がポツンと刈り残されて咲いていた。また、鶴岡市にある蕎麦屋の手洗い場には、ヨウシュヤマゴボウ(*Phytolacca americana* L.)が生けられていた。雑草は、市民生活に溶け込んでいる。

2. 雑草の遊びと食(アンケートから)

上記のように雑草は多くの文化的分野に関わる存在である。それらの分野の中から、雑草を使った遊び、および雑草を食べた経験などについて、次頁のようなアンケート用紙により質問した。アンケートの対象者は、主に秋田県立大学の大学祭に訪れた地域の人々、および市民講座や学会シンポジウムの参加者である。アンケート調査は、2007年の報告(露崎)以降も継続しており、2009年11月までに144名(男性66名、女性78名)、男女ともに10～80歳代から回答が得られた。

「雑草で遊んだことがある」と答えた回答者の割合は、70歳以上で100%であったのに対し、それより若い世代では91～94%の値を示した(第5図)。各年代において雑草を使った遊びの種類数が最も多かった人の遊びの内容を記した第2表によると、タンポポ類(*Taraxacum* spp.)やエノコログサ類(*Setaria* spp.)などの身近にある多くの雑草が遊びに使われていた。また、遊びの種類は、若い世代で少ない傾向があった。遊びを経験した時期は、小学生の低学年から中学年が多かった。

「雑草を食べたことがある」と答えた回答者の割合は、70歳以上で100%であった(第5図)。これに対し、50～



第5図. 雑草の遊びおよび食の経験者割合(年齢層別).

60歳代の割合は88%, 30～40歳代および10～20歳代の割合は各々78%であり、若い世代で「食」の経験割合が低い傾向を示した。スギナ(*Equisetum arvense* L.)やヨモギ(*Artemisia princeps* Pamp.)などの多くの雑草が調理されていた。第3表からも読み取れるように、10～20歳代で、雑草の料理の種類が少ない傾向があった。「食」の経験を初めてした主な時期は小学生であった。「遊び」が主に小学生ころにのみ行われたのに対し、「食」は現在も継続しているとする人が多かった。

雑草へのイメージは、「邪魔」、「やっかい」という否定的な見方の一方で、「可憐」、「たくましい」、「なくてはならないもの」とする肯定的な見方もあった。「子どものころは邪魔、今はたくましい」、「あると邪魔、ないと寂しい」などの回答にみられるように、同じ人が相反するような二面から雑草を捉えている場合が多かった。思い出については、幼いころに雑草で遊んだことや、戦時中の食糧難で雑草を食べたことなどが記された。

以上のように、雑草の遊びや食の経験などに、年代による違いが認められた。これには、小学生のころの社会・経済および市民生活の状況に、年代間で相違があることが関わっていると推察される。

おわりに

岩瀬(2006)は、雑草は悪い言葉ではないとし、「日本では「雑」の字は良くない意味に使われることが多いが、本来そうではなく、雑の本当の字は「雜」であり、その字のもとには「襍」である。「襍」は衣が集まっている姿だ。つまり雑草は草を軽蔑した言葉ではなく、多様性に富んだ草というように解釈したい。雑誌、雑記、雑談など内容は多様だが無駄なものとは言えない。中国の雑伎団は多彩で高度な技を見せてくれる。」と記している。

筆者も雑草を岩瀬氏と同様にとらえたい。すなわち「雑草は多様な種類(種)の草からなり、一つ一つの草(種)をとってみても、見方により多様な姿を見せる草である」と考えるのが良いと思う。「多様な姿」の一例

「雑草と文化」についてのアンケート(お願い) 「一部を省略・抜粋」

雑草(注)は、…。そこで、雑草と上記のような文化的諸分野との関わりの事例を…。つきましては、以下のアンケートに…。(注)ここでの雑草とは、田、畑、果樹園、庭、路傍、運動場など人間の活動と密接に関係する場所に生育している植物を指します。

I ご自身のことについてお伺いします。

性別(○で囲んで下さい): 男 女

年代(○で囲んで下さい): 10歳代 20歳代 30歳代 40歳代 50歳代 60歳代 70歳代 80歳代～

II 「雑草と文化」に関してお聞きします。

1. 雑草を使った遊びについて

1-1. あなたは雑草を使った遊びをしたことがありますか。(○で囲んで下さい) ある ない

1-2. 「ある」と答えた方にお聞きします。どのような雑草を使った遊びをしましたか。

	遊びの概略	その遊びをした時期	遊びをした県・市町村
記入例	ネコジャラシで猫と遊んだ	小学生(低学年)	秋田県秋田市

2. 雑草の食について

	料理の概略	食べた時期	食べた県・市町村
記入例	スベリヒユをおひたしにする	小学生から現在まで	秋田県能代市

3. 「雑草」と聞いて思い浮かぶことを、できるだけ多くお教え下さい。

4. 雑草についての思い出などがあればお教え下さい。

第2表. 雑草を使った遊びの種類数が最も多かった人の遊びの内容(年齢層別).

年齢(歳)	遊びの内容	体験の時期
10～29	タンポポの茎でシャボン玉	小学生(低学年)
	オオバコの相撲, エノコログサの毛虫	小学生
	シロツメクサ・タンポポの花輪, アメリカセンダングサやヌスビトハギでひっつき虫	小学生～中学生
30～49	タケノグサでマニキュアごっこ, オオバコやスミレでひっぱりごっこ, ツクシやスギナで「どこをとったでしょうか」クイズ, シロツメクサで花束・首飾りづくり, スズメノテッポウで笛遊び, カヤツリグサで蚊帳作り, カラスウリの爆弾, ヒメジオンで花飛ばしごっこ(びんぼうごっこ)	小学生(低～中学年)
	コセンダングサ・オオナモミでダーツ遊び, イヌタデの赤飯でおままごと, タンポポの綿毛とばし	小学生(低学年)
50～69	ナズナの実を少しむいて耳元で振って音を聞く, メヒシバで傘作り, メヒシバを絡めてお互いに引っ張り切れたほうが負け, トクサで切れているところを言い当てる, ジャノヒゲの種子で鞠つき	小学生(中学年)
	シロツメクサ・ムラサキツメクサの花冠・首飾り, ツクサで色水を作り絵や文字を描く	小学生(低～中学年)
	ネコジャラシで猫と遊ぶ,	中学生
	ヨメナなどの舌状花を取って花占い	小学生～高校生
70以上	カタバミで10円玉をきれいにする	社会人
	オヒシバで相撲とり, ムラサキカタバミの葉をからませたの草相撲, カヤツリグサで蚊帳作り, カラスノエンドウの果実で笛作り, カラスウリの種子を大黒様に見立てて遊ぶ, ヨウシュヤマゴボウの色紙で絵を描いた, イタドリの茎を輪切りにして水に浮かべ表皮を外側に反らせ水車のようにして遊んだ, アメリカセンダングサ・オナモミを勲章のようにして遊んだ, タンポポの種子を息で飛ばした, エノコログサ類で猫と遊んだ	小学生(低～中学年)

露崎(2007)のデータをその後の資料によって改変した。

第3表. 雑草の「食」の種類数が最も多かった人の「食」の内容(年齢層別).

年齢(歳)	調理方法	体験の時期
10～29	タンポポの天ぷら, フキノトウの天ぷら, ワラビの炊き込みご飯, ツクシの煮もの	小学生
	ヨモギ餅	小学生～現在
30～49	ツクシのきんぴら	幼稚園～小学生
	タンポポ類の根(コーヒー・きんぴら)・葉(おひたし), シロザの葉(おひたし)・実(ふりかけ), ヨモギで草餅	小学生～現在
	スベリヒユの煮もの・きんぴら・炒め物, オオバコ・イノコズチ・ツクサ・ドクダミの天ぷら	大学生～現在
50～69	スイバを生で食べたり塩漬けにした	小学生(低学年～中学年)
	イタドリを生で食べた	小学生～中学生
	アカザ・シロザのおひたし	小学生～高校生
70以上	ナズナのおひたし, ヨモギの草餅, フキノトウの天ぷら・味噌, セリのおひたし・ごま和え, ワラビ・コゴミの天ぷら	小学生～現在
	ツクシ・スギナを食べた, フキノトウの味噌和え, ヨモギを天ぷら・餅で食べた, ヤマゴボウの茎を皮をむいて塩もみ(冬に食べる), スカンボを塩で, アカザ(豚が喜ぶ), ヒシの実を煮て食べる, アケビの天ぷら・皮は味噌をつけて焼く, タンポポをアルコールにつけて咬止めに, アザミをゆでて食べる・味噌汁, ヒメジオン・ハルジオンをゆでる	無記入

露崎(2007)のデータをその後の資料によって改変した。

を、メヒシバ(*Digitaria ciliaris* (Retz.) Koeler)で示してみたい。

メヒシバはその制御(防除)が最も困難な雑草である。そのために、この草の生物学的研究、制御学的研究が精力的になされ、多数の知見(姿)が得られている(小林ら, 2005)。また、メヒシバは栄養価が高く飼料として利用されている。さらに、メヒシバは「かんざし草」と呼ばれ親しまれる。中国では蟋蟀草として知られ、コオロギ(*Gryllidae* spp.)を戦わせる娯楽においてコオロギを興奮させるのに用いられる。このように一つの草であっても多様な姿をもっている。

これまで雑草は、制御の対象として捉えられることがほとんどであった。そのため、制御するための基礎・応用として雑草の生物学・制御学が発展し、多くの知見が蓄積されてきた。これらに加え、雑草を文化の視座から捉える研究もまた、大切なことである。なぜなら、雑草は、上述のように広範な分野において文化的な対象となり、また文化的な役割を担っているからである。

アンケートの結果は、現代の子どもたちは昔に比べ雑草で遊んだり、雑草を食べたりしなくなったことを示唆している。筆者らの全国各地の聞き取り調査においても、同様な傾向を認める発言が多く得られている。

雑草の遊びや食は、子どもに、発見の喜びや感動を与え、自然への理解を深めさせる働き・効果がある。雑草は、その民俗、芸術、哲学、市民生活などの場面において、時に人を励ましの季節を告げるなどして人生を豊かなものとする。

人と自然とのかかわりの大切さが声高に叫ばれるようになった昨今、身近な植物である雑草の文化的諸分野の事例を収集・整理・記録し、提示・提言することは、雑草の持つ文化的側面の重要性を人々に示し、ひいては、人々が人間らしく幸せに生活することに少なからず貢献すると考えられる。

謝 辞

本稿の一部は、日本雑草学会から補助を受けた学術研究部会「雑草と文化」の研究活動によります。また、本稿をとりまとめるにあたり、松尾英輔博士(前東京農業大学農学部)に助言をいただきました。ここに記して謝意を表します。あわせて、アンケートへご協力下さった方々にお礼を申し上げます。

引用文献

相田みつを. 2001. じぶんの花を. 文化出版局. 東京.
有岡利幸. 2008. 春の七草. 法政大学出版局. 東京.
土居文恵. 2004. 素手でできる植物を使った遊び—アンケートを通してみる遊びとデータベースの作成—. 九州大学大学院生物資源環境科学府修士論文.

九州大学大学院生物資源環境科学府植物資源環境科学専攻植物機能利用学研究室.

深津 正. 2000. 植物和名の語源探求. 八坂書房. 東京.
Gackt. 2007. 野に咲く花のように(作詞・作曲). NHK みんなの歌. http://www.nhk.or.jp/minna/backnumber/bk07_02_03.html.
平谷けいこ. 2007. 摘み菜がごちそう. 山と溪谷社. 東京.
星野富弘. 1986. 鈴の鳴る道. 偕成社. 東京.
岩瀬 徹. 2006. 植物の生活型の話. 全国農村教育協会. 東京.
小林浩幸・露崎 浩・高柳 繁. 2005. 雑草モノグラフ4. メヒシバ(*Digitaria ciliaris* (Retz.) Koeler). 雑草研究 50 : 310-326.
小林正明・小林茉由. 2008. 草花遊び図鑑. 全国農村教育協会. 東京.
国立科学博物館. 2007. 特別展花 FLOWER ~太古の花から青いバラまで~. 朝日新聞社. 東京.
増田絹子・松尾英輔. 2001. 植物に関する色名. 九州大学農学部学芸雑誌 55(2) : 161-168.
松尾英輔. 1995. 年中行事と植物. グリーン情報 17(1) : 61.
松尾英輔. 1996a. 暮らしのなかにみるおめでたい植物とことわざやたとえ. グリーン情報 17(1) : 61.
松尾英輔. 1996b. 植物に託する暮らしの知恵—ことわざの中の植物—. グリーン情報 17(3) : 65.
松尾英輔. 1996c. 素手で植物と遊ぶ. グリーン情報 17(5) : 67.
松尾英輔. 2002. 園芸療法と園芸福祉—植物とのかかわりで心身の癒しと健康, 生活の質(QOL)の向上を目指す—. pp.3-44. 松尾英輔・正山征洋(編著). 植物の不思議パワーを探る—心身の癒しと健康を求めて—. 九州大学出版会. 福岡市.
中尾佐助. 1978. 世界の植物. 朝日新聞社. 東京.
大沢節子. 1988. 小さな花の押し花. 日本放送出版協会. 東京.
白洲正子. 1985. 草づくし. 新潮社. 東京.
杉山政美. 1983. 野に咲く花のように(作詞). Chord Master <http://www.chordmaster.jp/chord/?sid=2336>.
露崎 浩. 2007. 雑草を文化の視座から捉える. 日本雑草学会第22回シンポジウム「雑草をきわめる—歴史に学び, 未来を開く—」要旨 : 36-45.
山形大学出版会. 2007. いのちをいただく—草や木の命をもいとおしむ「草木塔」のこころを求めて. 山形.
山と溪谷社. 2000. 自然の愉しみ方 秋. 山と溪谷社. 東京.
柳田国男. 1962. 野草雑記・野鳥雑記. 角川書店. 東京.
湯浅浩史. 1993. 植物と行事. 朝日新聞社. 東京.